

# 表具師

稲崎知伸

父から受けたバトンを持って、兄弟で走り続ける。先頭を走る長男が切り拓いてきた道とは――。



いなざき とも のぶ  
1965年生まれ。経新堂稲崎表具店  
5代目の長男。浜町商店街連合会会長。  
東京都中央区日本橋浜町 2-48-7

## 空間を引き立てる 名脇役でありたい

細部に至る気配りが  
信頼につながる

天保八年(一八三七)に創業した経新堂稲崎表具店。五代目の稲崎棟史<sup>むねふし</sup>さんから引き継いだバトンは今、二人の息子が受け継いでいる。兄の知伸さん、弟の昌仁さん。いずれも職人だが、店の経営や町会などの地域活動を主に担うのが知伸さんだ。「私も親父と同じ長男で、この仕事を継ぐ想いは自然に芽生えていました。父や祖父が働く姿を見ながら学校に通い、学生時代から釘を打ったり木を切ったりといった簡単な作業もやらせてもらっていました」と話す。



刺繍が施された台紙に、線取りをすする作業「幅林」(ふくりん)を行う

子やふすまの需要が縮小していく時代の流れも感じていました。そこで建築を学んで、仕事の幅を広げたいと思ったのです」

建築の専門学校で学んだ後、設計事務所勤務し、住宅やビル、別荘など幅広い建築設計を経験。建築士の資格を取得したのち、家業に戻った。知伸さんが入ったことで、店はますます障子の製作にとどまらず、壁や床を含む内装全般の仕事まで請け負えるようになったという。こうして店の基盤を強化してきた

た知伸さんだが、近年は再び、本来の表装の仕事へと比重を戻しつつある。「今はいわゆるクロス屋さんも増えてきましたし、私たち兄弟も年齢を重ねて、以前ほど身体が動かなくなってきました。だから今は、うちでしかできない専門的な仕事に求められていると感じています」と知伸さん。

若い頃に修得した技術は、年月を経ても揺らぐことはない。家業に入ってから一年半ほどは、祖父の弟子だった職人から基礎を叩き込まれたという。「昔気質の人で、厳しかったですね。特に刃物の扱い。木を削るのも、布や紙を切るのも、すべて刃物です。まず砥石が平らでなければ、刃物も真っ直ぐ研げないので、道路の側溝の蓋に砂利を敷き、そこに砥石を当てて平らにする。何度見せてもまだだ」と突き返される。数ミリの違いですが、そんなことを延々と繰り返していました」と振り返る。

掛け軸の表装などは、預かり物のため、失敗は許されない。「子ども頃、遊びに来た友達がうっかり道具を踏んづけたら、何やってんだ！って怒鳴られていましたね。父や

祖父の背中からは集中力が伝わってきました。今、職人たちには「細部にまで気を配れ」と教えています。例えば養生テープを乱暴に剥がせば、床の塗装まで傷んでしまう。そこをゆつくりと丁寧に剥がすことが大事。そういえば親父も慎重に剥がしていたなと、自分が指導する立場になってから思い出しますね」

表装の仕事は、あくまで主役である作品を引き立てる役だと知伸さんは語る。「修復によって甦った作品をご覧になった時のお客様の笑顔――。その瞬間が見たくて、この仕事を続けています」



右/店内には表装の制作例が展示されている。また、中央区に伝わる多様な文化資源を伝える「まちかど展示館」にも参加し、道具などを紹介している 左/仕事時の真剣な眼差しから一転、地域の祭や催しの話になると柔らかな笑みがこぼれる